

猫蓑通信

第 118号

令和四年
(2022年)
10月15日発行
(年4回発行)

生生庵青木秀樹会長追悼

鈴木了斎

残念ですが、猫蓑会会長、生生庵宗匠青木秀樹丈のご逝去をお伝えしなければなりません。

青木会長は、昨年八月に体調を崩され、入院されて以来、一年余にわたって闘病を続けてこられました。九月四日の早朝に永眠されました。享年八十三歳でした。

青木会長が猫蓑会の会長に就任されたのは平成十五(2003)年でした。その前年、設立主宰の東明雅先生が体調を崩され、会長辞任と、青木副会長への会長バトンタッチを決意されて、



翌年一月刊の『猫蓑通信』第五十号巻頭の「猫蓑会の来し方行くえ」という文章でそのことを発表されました。それ以来ほぼ二十年にわたって会長を務められました。また、その傍ら、平成二十九(2017)年四月から令和三(2021)年三月まで、四年間にわたって一般社団法人日本連句協会の会長も務められました。

「楽しくなければ連句じゃない、楽しいだけでも連句じゃない」がいつもの口癖でした。その通りに猫蓑会の活動を盛り立ててきて下さったと思います。長い間の連句界へのご貢献に感謝するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

昨年のご病氣は突然のことで、入院翌月からは、電話での連絡も不可能になってしまい、ご親族を介して時折ご様子を知ることしかできませんでした。従って、ご自身の後任を選任、発表するなどのことも、なさらないままになってしまいました。

ご逝去の報を受けてすぐに臨時理事会を開催し、その後も今後の会の運営についての検討を重ねてきました。会長人事をはじめ、会の運営体制全体の若返り、世代交替を大胆に進めることが不可欠だという結論に至っています。十月二十七日の第百六十一回猫蓑会例会では、具体

●目次●

▼生生庵青木秀樹会長追悼	鈴木了斎	1
◎令和四年同人会作品	源心六巻	2
▼蕪村句「甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋」考	吉丸雄哉	4
▼和漢連句というもの	鶴飼桜千子	6
▼東都子顧問の思い出	鈴木了斎	7
◎第百六十回例会		
令和四年猫蓑総会作品	歌仙五巻	8
◎第十回猫蓑会リモート	二十韻四巻	10
◎第九回猫蓑会リモート	二十韻三巻	12
◎南砺市いなみ全国連句大会 2022		12
猫蓑会員受賞歌仙四巻		
富山県知事賞		
歌仙「冬夕焼」	衆議判	13
南砺市教育長賞		
歌仙「悪の華」	杉本聰 捌	13
南砺市議会議長賞		
歌仙「ふと拾ふ」	佐藤徹心 捌	14
▽付句各一句互選・選評	佐藤徹心	
浪化賞		
歌仙「冬桜」	近藤純子 捌	15
▽初物尽くしで、聖地へGO! — 近藤純子		
▼事務局だより		16

的な方向性を提案できる予定です。

新たな運営体制のもとでも、連句の振興をめざす猫蓑会の活動が引き続き発展して行くことを、青木会長も願っておられるはず。会員諸氏のご協力を切にお願いいたします。

火付盗賊改の座
源心「猛暑にめげぬ」 荒木鑑捌

外濠の猛暑にめげぬ釣師かな
鑑 美智子
番付表は金魚にもあり
我が手なる青墨の書のリビングに
ひろみ 肇
日用品だけ詰めて出発
遊眼
観月会今宵の宿は嵯峨の奥
鑑
口説いて迫るうそ寒の道
智
地芝居のお七の役を十八番にて
み
なんてかはいすつぴんの顔
肇
古墳より神獣鏡の出土せり
眠
夢追ふばかり結論は未だ
鑑
大リーグ張り切り過ぎて腰手術
智
春の炬燵で読書三昧
み
帰らうよ花満開の故郷へ
肇
鬼ごっこして遊ぶ焙炉場
鑑
ナオ 独り身は蛙の声に癒されて
眠
電源オフのままに籠りぬ
智
ステレオの付けっ放しになつてをり
肇
祇園祭で芸者総揚げ
み
はずつばの仮面に隠す辛き恋
眠
パーティション越し熱き視線を
鑑
投げ銭で生計立てるミュージシャン
智
革命の地に注ぐ葡萄酒
肇
月影に黒貂を追ふ蒙古族
み
RV車の凍つるエンジン

ナウ み仏の大きうてなに身を預け
眠
世界記録に運も幸ひ
鑑
思ひ出の話の続く花のもと
智
香りも食べる独活の天婦羅
み
連衆 聖成美智子 江津ひろみ 宇田川肇
内田遊眼

大目付の座
源心「あの哄笑を」 武井雅子 捌

雲の峰あの哄笑を今一度
雅子
蜻蛉生まれる細き葉の先
あき子
懐石に刷目の茶碗引き寄せて
良子
携帯電話マナーモードに
敦子
単線の車窓に映る月高し
吉文
耳に幽けく風の盆唄
良
鯛の森での逢瀬うきうきと
吉
すでに効かない恋のブレーキ
あ
先陣を競ふ戦の咄など
良
DVDは通販で買ふ
敦
山の日のとつぷり暮れて薬喰
あ
謎の電波は宇宙より来る
吉
花筏吸ひ込まれゆく頭首工
良
紙ふうせんに息を吹き込み
敦
ナオ 五大陸バイク旅行は春の夢
良
四文字熟語埋まる空白
あ
仕組まれた江川卓の巨人入り
敦
待ち伏せをされ思ひ告げられ
吉
満帆のヨット快走逃避行
あ

慈顔に在すマリア観音
良
紛争の絶えぬ世なれど生き抜いて
吉
なじみの飲み屋座る定位置
雅
凍る月ムーミン谷の音楽会
敦
幼ならの指す冬の星々
吉
ナウ 防災品点検補給忘れずに
あ
どれにしようかマカロンの色
全
来し方を友と語らふ花の午後
雅
薄目をあけて眠る猫の子
敦

連衆 岩崎あき子 本屋良子 武井敦子
永田吉文

奥祐筆の座
源心「暑気盛ん」 林転石 捌

暑気盛ん駅看板に工事中
転石
靴紐結び直す時の日
葵
シヨーウインドーマネキンの顔横に見て
霞
異国の人の通り過ぎ行く
魚彦
病蝨招き入れたる月の窓
純子
想ひ切々梶の葉の歌
葵
独り寝の日々を重ねて別れ蚊帳
彦
家財道具を見ては断捨離
純
SDGS猫も杓子もかしましく
葵
世間体なぞどこをふく風
純
仙人と言はるるまでの髭の丈
彦
昔語りの舞台はつこり
霞
ひつそりと花満開の奥の院
彦
竜吐水吹く春の夕暮れ
葵

ナオ 初虹を仰ぐ親子の帰り道

フライドチキンの箱を小脇に

調香の修行南仏風の街

品変はりたる懸崖の松

妖精に恋の手助けお願ひし

掛かる覚悟のハニートラップ

寒月の刃己は貫かれ

匠たたくむ雪つりの庭

酒米の磨き加減の微妙なり

古民家修復なつて開業

ナウ 売物の餡の味見が止まらない

左右で声を変へる咄家

トロツコは花の山へと差しかかり

彩雲仰ぐうららかな午後

連衆 石川葵 高塚霞 御園魚彦

近藤純子

船手頭の座

源心「ピアス揺らすや」

棚町未悠

シヤラシヤラとピアス揺らすや夏の風

未央柳のたをやかな蕊

初めての木目込人形上々に

デカフェ珈琲ハンドドリッパー

月光に粒のきはだつ砂時計

ハロウインの君のほほゑみ切なくて

消え入りさうな禿びた蝋燭

財政を立て直す武士そろばん

彦

葵

純

彦

純

霞

葵

純

彦

純

彦

石

純

外堀通り捜すコンビニ

ミッキーのお面被つて地下鉄に

難病の子の胸に抱く夢

冒険家越ゆる国境花吹雪く

心細げに捨て仔猫鳴き

ナオ 旦那寺無住となりて舞へる蝶

堀の中にて習ふエクセル

棒グラフ世界の気象明らかに

冬將軍がどかり居座る

流し目で作り咳する月の下

夫婦門付け恋のひと節

二合半の徳利かかへて労ひぬ

街に突然光るいかづち

ダヴィンチはヴィンチ村出の人の意味

いにしへびとの豊かなる鬚

ナウ 猿も木から落ちるとのこと油断すな

山に籠りて読経三昧

思ひこめいつまでも焚く花篝

池のほとりはけふものどらか

連衆 鈴木千恵子 佐藤徹心 西田荷夕

勘定奉行の座

源心「仏塔ひとつ」

鈴木了斎

十葉の花に仏塔ひとつづつ

合はす両手にとまるほうたる

飛人のジャムセツシヨンのきりもなし

数多の帽子揺れる人波

千

心

千

夕

悠

悠

心

夕

心

千

悠

悠

夕

心

千

悠

夕

ウ 休日の快速電車通過して

スノーボードへ誰を誘はう

風花がきらり月下の君と僕

洒落者だつたあの頃の夫

明るくて賢くて色浅黒く

コーヒー豆をちよつと煎りすぎ

酒ならば気持ち熱めのぬる爛を

琵琶湖疎水の流れ緩急

花の下で拾はれた猫名はハナと

ナオ 春愁の尽きぬ理事長室の客

またもOS新しくなり

苦も染もなき幼児の歌を聞く

松阪牛のステーキが好き

パーティーはたけなはオートキャンプ場

いい匂ひする長い黒髪

六条の御息所冷まじき

生まれかはずつて爽やかに逢ふ

月の舟けふは何処まで漕ぐのやら

文字盤を打つ音の軽々

ナウ 不器用なテキサス野郎馬鹿にして

勘定奉行ラストサムライ

花の窓を出てゆきたがるわが心

口笛の音の澄んでのどらか

連衆 鈴木美奈子 平林香織 箭内敏枝

織

全

斎

枝

斎

織

奈

織

全

織

奈

枝

織

斎

奈

織

斎

奈

織

全

織

枝

令和四年八月二十六日
於 アルカディア市ヶ谷

御書院番の座

源心「肥後守」

田中秀夫 捌

青梅雨や片刃錆びたる肥後守

秀夫

漆喰の壁光る斑猫

洋子

五六人港の見える丘に来て

孝子

ブレンド自慢淹れるコーヒー

忠史

ウ 誰が為にヘミングウェイの月昇る

洋史

夜寒の宿に語る真実

夫

運動会短距離走で惚れた彼

史

捨つるに惜しき独り暮らしは

孝

目が合へばびたりと分かるうちのポチ

夫

ここは危ない盛土法面

洋

世紀経て語り継がれる名勝負

孝

うちなーんちゆの古酒恋しや

洋

舟歌に酔ひつつ下る花見舟

史

巣箱を覗く小鳥待ちわび

夫

ナオ 次々と列をなしたるシャボン玉

史

プリンシパルを目指す美少女

孝

魔法から白馬の騎士は現れて

夫

素肌に残る鬘の乳香

洋

淋しさを慰め合ひて明易き

孝

背丈はとうに母を追ひ越し

史

弁当は砂糖のきいた玉子焼

洋

スイッチバックの駅に撮り鉄

史

月明かりだるまストロブ囲みつつ

夫

神の居ぬ間にはづむ日当

孝

ナウ 内科医の処方箋には漢方も

夫

車椅子でも自由自在に

洋

花の宵この夢覚むること勿れ

孝

関八州に鐘籠なり

史

連衆 大島洋子 坂本孝子 根津忠史

令和四年八月二十六日
於 アルカディア市ヶ谷

蕪村句

「甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋」考

吉丸雄哉



私は三重大学で江戸時代の文学を教えています。連句は素人ですが、コロナ禍のためオンラインになってから、連句会に時折参加させていただいております。ここ十年ほど地域振興の關係もあつて忍者を研究しています。最近、気になったことを記します。

江戸時代中期の俳人・画家の与謝蕪村（二七一六〜一七八四）には「甲賀衆のしのび

の賭や夜半の秋」という忍者を詠んだ句があります。当該の句はもともと蕪村の弟子の几童が蕪村の一周忌にあたって秀句を集めて編んだ『蕪村句集』（天明四年（一七八四）刊）に収録されたほか、それ以前の『蕪村自筆句帳』と『落日庵句集』にも収録されています。尾形仿『蕪村俳句集』（岩波文庫、一九八九）では明和五年（一七六八）九月一日の成句とみえています。また、安永二年（一七七三）十月二十一日付の大魯宛書簡で、蕪村が大魯に選集『あしのかげ』に甲賀衆の句を含む四句を加えるように頼んだことがわかります。蕪村にとつては思い入れのあつた句かもしれません。

この句への近代の解釈をいくつか見てみます。日本古典文学大系五八『蕪村 一茶集』（岩波書店、一九五九。当該箇所は暉峻康隆校注）によれば、

○甲賀衆―江戸幕府に同心として使えた甲賀の郷士で、忍術に秀でていた。

○夜半の秋―秋の夜に同じ。秋の夜長を退屈した甲賀衆が、ひそひそと賭をして忍びの術くらべをするさま。伝奇趣味の句。

とあります。尾形仿『蕪村俳句集』（岩波文庫、一九八九）では、

甲賀衆―甲賀組。近江甲賀の郷士より登用した同心。

しのび―内緒の意と忍術をかける。という語注を施しています。

『蕪村全集』巻一（講談社、一九九二。尾形仿・森田蘭校注）では、「夜半の秋」が季語の秋句

とし、注は、

○甲賀衆 甲賀組ともいう。近江の国甲賀郡の郷士で、甲賀流忍術をもつて同心として江戸幕府に用いられた。

▼秋の夜長に退屈し果て、甲賀衆がこっそり賭博している。「しのび」に「隠れて」と「忍者」の意をかける。

と記しています。以上のことから、近江国甲賀から幕府に取り立てられた甲賀同心らが秋の夜長のつれづれに禁じられている賭博をやっている情景を詠んだ句と解釈されているようです。

しかし、この句の解釈に私は違和感があります。まず、町人であった蕪村が幕臣としての甲賀衆（甲賀組・甲賀同心でも）をよく知っていたと思えません。また、現在の解釈では甲賀衆を軽んじているといえますが、そういう句を詠むとも思えません。

幕臣の甲賀衆ですが、甲賀組ともいつて「近江国（滋賀県）甲賀地方の郷士で、江戸幕府に仕えて鉄砲隊の同心を務めた者たち。また、その集団。甲賀者。甲賀衆」（『日本国語大辞典第三版』の「甲賀組」項目）のことです。

三田村鳶魚（えんぎよ）によれば「甲賀組または甲賀衆ともいった人達が、隠密役をつとめたということとは知らない。甲賀衆というのは同心で、御留守居附の者だったと聞いている。隠密などという役をつとめることは決していない。甲賀組というと、例の忍術の本場が江州の甲賀だから、そんなことを引かけたのである」（『三田村鳶魚江戸武家事典』）とあるように、隠密役と関係

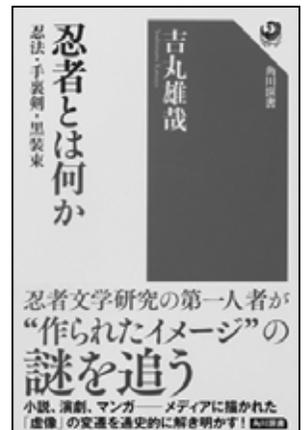
のない御留守居附という江戸城内の警備をしていました。『古事類苑』官位部六九「百人組之頭」に「甲賀組」の様々な史料が紹介されていますが、これを見ても隠密御用や忍術と関係ありません。

蕪村は摂津国東成郡毛馬村（現大阪市都島区毛馬町）に生まれ、二十歳頃に江戸に下り、早野巴人に入門するなどして六年ほどそこで過ごしています。ですが、江戸にずっといたわけでもなくその後は諸国をめぐったのちに最終的に京に居着いています。幕臣の甲賀衆を句に詠むほど知っていたとは思えないのです。

この句の注釈でもっとも早いものは松窓乙二（おっぴに）述『蕪村発句解』（天保四年（一八三三）刊）で、前太平記に甲賀衆の事あり。白峯の甲賀山より出たり。甲賀の士はしのびの術を得たること。世に伝ふ処也。

と説明しています。『前太平記』は平安中期から末期までの二〇〇年間の事変・合戦を描いた藤元元の編んだ通俗史書で、天和元年（一六八一）に刊行されています。源為義と敵対した源義綱が本領の山に立てこもって戦いますが、甲賀衆もあるいは忍術らしきものも出てきません。それでも『前太平記』に言及するので、幕府の甲賀同心を詠んだ句とは解釈していいまいと思えます。

「甲賀衆」ならば「江戸時代、近江国（滋賀県）甲賀郡に土着した地侍の総称。幕府に抱えられた甲賀組与力は、後に二五騎、同心は一〇〇人となるが、甲賀にとどまって郷士に終始し、忍



吉丸雄哉著 『忍者とは何か 忍法・手裏剣・黒装束』 KADOKAWA刊 角川選書

者として忍役を勤めた者が多かった」（『日本国語大辞典第二版』）とあって、幕府に抱えられた甲賀組だけでなく、甲賀の地侍や江戸時代の郷士も対象にしています。

それではこの句はどのように解釈すればいいのでしょうか。「しのび」が詠まれているのは確かです。それでは句中の「甲賀衆」を同じく忍者忍術で知られた「伊賀衆」に置き換えることが可能でしょうか。

蕪村の代表句のひとつに「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉」（のむかひな）があります。鳥羽殿は白河・鳥羽上皇の離宮です。保元の乱の一場面を想起させるような緊迫感があり、また絵画的だと言われている句です。「甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋」について、「鳥羽殿」の句のような緊張感を私は覚えます。甲賀衆が秋の夜長の深夜に城内に忍びこみまさに火をかけようとする場面ではないかと思うのです。

伊賀衆ではなく、甲賀衆なので、甲賀忍者の活躍を見てみると、足利義尚との野戦である「釣の陣」（まがりの）や、徳川家康に協力して上ノ郷城の鶴殿長照を永禄五年（一五六二）に攻めた「鶴

「鵜殿退治」があります。

鈎の陣は有名ながら実際に確かめる史料はなく、江戸時代に入ってから「甲賀古士由緒書」や木村源四郎『淡海温故録』（貞享年間一六八四～一六八八）頃成）に記されるようになりましたが、これらは写本なので、よく知られていませんでした。

「鵜殿退治」は大久保忠教『三河物語』（元和八年（一六二二）頃成）に記されています。『三河物語』も写本ながら、残存する数からすればたいへんよく読まれており、蕪村が目を通していてもおかしくないです。

「鵜殿退治」ならば史実は二月二十六日のこと

和漢連句というもの

鵜飼桜千子



和漢連句とは、その名のとおり和句と漢句を数句ずつ交互に連ねた連句です。

今は和漢連句を目にする機会が少ないかと思いますが、室町時代から江戸時代前半の時期には公家、連歌師、儒者、禅僧たちの集うところで時には連歌を凌ぐ人気を得て楽しまれた詞章の遊びでした。

であり、季節が合いません。ですが、「しのびの賭」はたいくつした忍者らが忍術を遊びでつかっているのよりも、生きるか死ぬかの勝負のかかった場面での忍術披露をイメージして作られた句のように思いますが、いかがでしょうか。来年度の大河ドラマ「どうする家康」では、鵜殿長照に野間口徹が配役されており、「鵜殿退治」が詳しく描かれるようです。ご覧のときにはこの句のことを思い出し出してください。

なお、小説・演劇に関する私の研究は『忍者とは何か』（KADOKAWA、2022/4刊）に記しました。『三河物語』にも触れています。よろしければご覧ください。

文明十三年五月の百韻「獸の」の表八句

獸の香をもそへばや石の竹

露白滴黄梅

涼自高軒動

風当小牖摧

ばせう葉のやぶれをとちよ雨の糸

旅のころもゝはぎが花ずり

夕月のうつろふのべを分すぎて

山のかげこそみちはくらかれ

現代の式目その他は考えずお読みください。

発句、第四・五・八句は後土御門帝の御製です。発句の背景には「麝香眠りて後 露檀匂ひ

……」等の漢詩があったと言われています。「獸の香」とは麝香のことだそうです。

和と漢、二つの世界の連想、映発、融和を感じます。

応仁の乱で焼けつくされた世に和漢連句はなんと豊かな表現を紡いでいたのでしょうか。

蕉門においては芭蕉と素堂の和漢の歌仙「破風口に」が残されており。

さて、現代の和漢連句ですが、清水瓢左師、三好龍肝師、赤田玖實子師と引き継がれ今に至っております。

基本的な式目は普通の連句と何ら変わりません。それに和漢特有のルールがプラスされます。

まず、発句が和句ならば和漢行、漢句ならば漢和行と言います。発句の上から二文字目の漢字を韻に取ります。この方法は瓢左師の考案ですが、脇句が和句の場合にも便利で、これにて韻字を決め、スタートします（韻の決め方は他案もあり）。一例をあげて説明しましょう。

和漢行 「吉原も水戸も」 ※○印は韻

吉原も水戸もゆかしき夏の色

梅雨明芳園

G線の音を低めに直すらむ

追ひかけ算を速やかに解き

慈母倚西窓

父待月南軒

千恵子

香織

賢

桜千子

禎文

全

発句の「原」の文字から元韻になります。韻を使うのは漢句の付けが短句の場合のみです。この作品では脇句と六句目です。また、ひとつの折に一所の対句を入れます。五句目と六句目で対句になっています。

ひとつの折に和句と漢句は半分ずつにします。何句目を和句で詠むか、対句をどこで詠むかはその時の座の流れ次第です。対句は、漢句が奇数句と偶数句で並ぶところで詠みます。この逆、漢句が偶数句と奇数句のところで並んでも対句にはしません。

この後、裏に入りますが、恋を詠むとか、お酒を詠むとかいつもの連句とおりです。ただ発句に用いた漢字だけでなく、月、花以外は同字を避けます。歌仙でもこの縛りは大変ですが、百韻で同字は一つだけの作品もあります。

裏 蓑 虫 独 漫 揺 千恵子
干柿盗むルパン現れ 賢
逆転にぼんぼん掲ぐチアガール みみこ
白 項 残 吻 痕 千恵子

漢句といえども俳諧本来の俗談平語を按配しつつ巻いていきます。縛りが多いぶんだけ、パズルを解くような面白さがあります。足りない脳みそを叩きつつ愉しみを感じるひとときでもあります。勿論、浅学の身ゆえ、ポカをすることもありですが、この面白さは連句人の好むことに違いないと思っております。ぜひ、和漢の世界へお越しください。(事務局だより参照)

東 郁子顧問の思い出 鈴木了齋



長きにわたって猫蓑会顧問を務められた東郁子様が、昨年十月九日に永眠され、早くも一周忌がめぐってきてしまった。

郁子様は、言うまでもなく猫蓑会設立主宰、故東明雅先生の奥様だ。享年百一歳の長寿を保たれ、明雅先生の没後十八年間、私たち猫蓑会員をいつも優しく見守って下さった。例会などでお目にかかるたびに、にこやかにお声をかけて下さったお姿を忘れられない。

平成十五(2003)年十月に明雅先生が亡くなられた翌十六年七月、新盆のお線香を上げさせていたため、故式田恭子さんと一緒に柏市のお宅、猫蓑庵をはじめにお訪ねした。

明雅先生の仏壇は二階にあり、郁子様も普段は二階で生活しておられるとのこと。台所などは一階なので、急な階段を何度も上り下りされる、その足取りの軽さに驚いた。当時 は八十四歳でいらっしやっただ。

その折、長女の武井雅子さんを交えた四吟の膝送りで巻いた二十韻の表四句。

二十韻「盆花や」 膝送り
盆花やお変はりのなき男ぶり 了齋
遠の客人訪へる新涼 郁子
山間の小さき学舎月浴びて 恭子

口に含んだ大き鉛玉

郁子

五年後の平成二十一年末に、翌年の『猫蓑通信』の明雅先生七回忌特集に掲載する予定の「東明雅の思い出」と題するインタビュー記事(第七十八、七十九号に掲載)のため、ふたたび猫蓑庵をお訪ねした。そのときも階段を上り下りする足取りはまったく変わっておられなかった。そのときにお聞きしたのだが、お好きな卓球をするために市営のスポーツ施設によく通っておられるとのことだった。それにも驚いたが、雅子さんによるとその習慣は最晩年までずっと続けていらしたそう。お宅でも曾孫さんたちが訪れるとすぐ卓球になり、卓球にかなする限り、微笑ましくらい負けず嫌いだっただのこと。

戦後の食糧難時代の買い出しの話も強く印象に残る。農家で買った薩摩芋を十貫目(約三十七キロ)くらいはリュックに詰めて背負われたそう。華奢なお見かけからは想像できないそうしたご壮健が、人に対する優しさの裏付けになっていたに違いないと思う。

明雅先生を交えた文音や、例会でも何度もご一座させていただいたが、私は先生が亡くなられても、奥様の存在を通じて先生との生きた繋がりが続いているように感じていたらしい。そのことに、奥様が亡くなられたときに気付いた。一つの時代が終わった、そう感じられた方は他にもおられるだろう。改めて、郁子様に感謝し、心からご冥福を祈ります。

隅田川の座
歌仙「百合が香や」 本屋良子 捌

百合が香や高みに在す観世音 良子
 青田の波の寄する畦道 了齋
 放課後はいつも集まる猫カフェに 純子
 糸屑拾ふテーブルの隅 霞
 絵硝子の向かうに月の出た模様 齋
 麻の実飛んだ気配かそけき 良
 秋祭法被兄弟駆けだして 霞
 ルービックキューブ速さ競へる 純
 吾輩は町一番の美丈夫ぞ 良
 あなたはただの家の飼犬 齋
 過去と今シヤネルの瓶に秘められて 純
 流れて止まぬ萍の月 霞
 満ち潮に漁へ漕ぎだす漢たち 齋
 アメリカ通となりて帰国す 良
 日曜はイエスの許に跪き 霞
 お供ものの蕨餅食ふ 純
 四方山の話きりなき花の縁 良
 蛇の軌跡の光くねくね 齋
 ナオ 自動ドア開いて突然ゆるキャラが 純
 いらつしやいませ声はバリトン 霞
 全力で止めて止まらぬ恋の坂 齋
 兎の穴でひそと逢引 良
 映画館固いシートに囚はれて 霞

市章掲げる碧眼の騎士 純
 征服の壁に母国の文字刻み 良
 生贄揺れる縄の先端 齋
 そこにゐるそれだけで良し癒し口ポ 純
 君の笑顔が宝物だよ 霞
 竹林に七人集ひ月賞づる 齋
 新涼に酌む故里の酒 良
 ナウ 蓑虫の父よ父よと軒深く 霞
 ベールに隠す往年の夢 純

判決書裁判官の風呂敷に 良
 筆走らせる美しき嘘 齋
 花吹雪洛中の景彩りて 純
 山の傍にかかる初虹 霞
 連衆 鈴木了齋 近藤純子 高塚 霞

神田川の座
歌仙「御船蔵跡」 根津忠史 捌

碑に御船蔵跡夏木立 忠史
 ふいと止まれる薄羽蜻蛉 未悠
 見習ひは刺身包丁研ぎ上げて 雅子
 片つぼうだけつけたイヤフォン たけを
 ふり向けば後ろの山にかかる月 敏枝
 豊年祝ひ馬も一役 史
 烏瓜リースにふたつ赤々と 悠
 都会の趣味に何故か惹かれる 雅
 唇に退廃といふ毒を持ち を

アイラブユーをかんたあの時 枝
 五郎へと傘を差し出すお虎さん 史
 冬童咲く畦の十字路 悠
 月仰ぐ味噌玉やうやう作り終へ 雅
 素振り続ける野球少年 を
 この先に知る人ぞ知る小間物屋 枝
 記者会見は密集を避け 史
 優待の自画像展に花吹雪 悠
 くるくる回す春の絵日傘 雅

ナオ 暮遅しガタピシと行くハイゼット を
 家庭菜園友と収穫 枝
 背比べする度抜かれ口惜しく 史
 『フラン七五』どうしたらいい 悠
 飲むほどに昔の恋がよみがへり 雅
 夫婦の滝の落ちる岩陰 を
 湯の街に新内流し泣く如く 枝
 金払ひ良き大店のぼん 史
 慣れた旅ドナウクルーズ猫連れて 悠
 天に届くか教会の塔 雅
 望月の他は語らぬ詩の仲間 を
 垣根覗けば鴉の速贄 枝
 ナウ 檀紅葉スイッチバックで村興し 史
 チエスの講座を新規開設 悠
 朝二錠昼夜三錠忘れずに 雅
 蛇口を右にきつちりと締め を
 威を正し花の宮城肅々と 史
 見事な髭の奴舞ふ 枝
 連衆 柵町未悠 武井雅子 山中たけを 史
 箭内敏枝 史

小名木川の座
歌仙「画眉鳥の」 武井敦子 捌

画眉鳥の高鳴き響く青田風 敦子
 梅鉢草の揺れる山路 香織
 近頃は囲碁のゲームを書齋にて 鑑
 煎茶濃いめに手作りの菓子 志保子
 木造の倉庫の屋根の月静か 織
 一家総出で秋の繭掻き 敦
 さはやかにティーショット打つ軽井沢 志
 チラ見した後愛の告白 鑑
 いつまでも若くみられる週末婚 敦
 鍵と財布を何処に置いたか 織
 今日もまたオレオレ詐欺の電話来て 鑑
 雪のまにまに覗いてる月 志
 絨毯にのの字になつて猫眠る 織
 遊びながらのピアノ練習 敦
 ダビンチの水門を訪ふ建築士 志
 不要なものを買ひ上げる店 鑑
 人力車花の都を走りをり 敦
 針魚を焼いてきゆつと一杯 織
 ナオ暮れかぬる社の庭は賑はひて 鑑
 ひこにやんも居てくまモンも居る 志
 自意識を捨てての勇氣を持ちませう 織
 手に手を取つてしけこんだ宿 敦
 後朝はけだるい床のほつれ髪 志

令和四年七月二十一日 首尾
於 江東区芭蕉記念館

レンタル浴衣闊歩する娘ら 鑑
 パリ祭のバーゲンセール丸の内 敦
 「巖窟王」を一度二度読む 織
 満月を運べと叫ぶ荒波に 鑑
 見物をする鹿の角切 志
 故郷の新米どんと届くらん 織
 絵手紙に書く母の紉台 敦
 ナウ走馬灯廻る夜汽車の広き窓 志
 かくれんぼうのきりもなき子ら 鑑
 バッグには赤白黄のビタミン剤 敦
 仏舍利塔のしみ返る堂 織
 惜しみつつ花盛る野を後にして 鑑
 旅の終はりのうらかな午后 志

仙台堀川の座
歌仙「自動ドア」 佐藤徹心 捌

自動ドア開いて押し入る蝉時雨 徹心
 サマードレスのくつきりと青 美奈子
 南国の海の記憶の遠くして 魚彦
 ずらりと揃ふ家庭医学書 美智子
 望月にヒントを得たと新メニュー 有子
 何故か惹かれる鳥兜の美 有
 万鬼祭老女妖女とくりだしぬ 奈
 あなたを追つて伸びていく首 有
 恋文は鉄砲玉よと恨み節 彦

フランス人の日本語教室 智
 犬の糞踏まずに歩く大通り 有
 お安くします力車一周 彦
 口ずさむ歌は舟歌凍つる月 智
 太き梁には鮭の干されて 有
 四合の酒は欠かさじ故里の父 奈
 浄土で待つといつも言つてた 全
 青春切符花に追ひつく北帰行 彦
 コンフリー湿布むくみとるとか 有
 ナオままごとの客となりたる白き蝶 智
 結ひたての髪高々とゆく 彦
 長椅子にしきりと誘ふ下心 心
 わたしは処女よ何をぬけぬけ 彦
 とげぬきのお地藏さんに手を合はせ 奈
 水琴窟の音の涼しき 智
 回廊をのそりのそりと臺 心
 埃払へば若冲の印 有
 眼にいとブルーベリーを注文し 全
 隣同士で値下げ競争 心
 天高く弓張月が居座りぬ 奈
 菊人形の顔の小さき 有
 ナウ江戸つ子のわれ先に喰ふ走り蕎麦 奈
 混み合ふ駅をぶつかりもせず 有
 異常気象魚市場には珍種見る 心
 うちの上司に似た顔の奴 奈
 谷川の早瀬採み消す花筏 心
 苗田に風のやはらかく吹く 彦

連衆 鈴木美奈子 御園魚彦 聖成美智子
佐々木有子

大横川の座
歌仙「晩夏光」 岩崎あき子 捌

ゆりの木の広葉を洩るる晩夏光 あき子
 飛び石黒く濡らす打水 千恵子
 子に乗せる満員のバス塾前に 俊子
 好きなフィギュアはつねに離さず 転石
 初めての異国の月に魅せられる 吉文
 城趾に吹く爽やかな風 吉
 やや寒に髭の楽士の試し弾き 千
 ミシン踏む音お針子の部屋 あ
 窓開けてあなたの影を心待ち 石
 身分匿した幸せな日々 俊
 残り香に恋の終止符ためらわれ あ
 推理小説ペンを置く時 吉
 月の下夜盗のつくつくふくと汁 俊
 頭の形に脱いだ冬帽 千
 進化した「富岳」がはじく円周率 吉
 右と左と視野が異なり 石
 革命を夢見たあの日花ふぶく 千
 鐘は臙にせごどんの坂 あ
 ナオ 画帳には春飛魚生きてある如し 石
 野菜のうま煮だしを利かせて 俊
 カリスマがシェーカーを振る地下酒場 あ
 ダート投げれば射貫く金的 吉
 伝統の技手拭で目高とる 俊

遠く響ける夏安居の経
 逢へぬ間に焦がれ焦がれて痩せ細り
 邪淫の性が本妻に憑き
 知恵の輪のパズル絡まり解けない
 加齢ですねと医師の一言
 江戸の月いつもお前にせちがらく
 名品高値下り松茸
 ナウ 人相の悪さをかはれ村芝居
 クリーニングは父祖の代から
 西麻布霞町だと言ひ直す
 譲れないのは猫の縄張
 花の雲にこころ優しく包まれて
 網いつばいの蜚鳥賊捕る
 連衆 鈴木千恵子 三木俊子 林 転石
 永田吉文

令和四年七月二十一日 首尾
 於 江東区芭蕉記念館



令和四年八月十一日 首尾
 第十回猫養会リモート Zoom 10
 1~4
 蜚の座
 二十韻「煉羊羹」 大島洋子 捌
 新涼や二センチに切る煉羊羹 洋子
 上がり框にると邯鄲 桜千子
 門を外す良夜の影ならん あき子
 庁舎の前で停めるタクシー 転石
 ありがとうそのひと言の距離微妙 桜
 看護師は皆笑顔可愛く 洋
 国境に帰らぬ人を待ち続け 石
 小指の赤い糸は結ばれ あ
 ちゃんちゃんこ背守り大き亀甲紋 洋
 冬至南瓜を馬車に見立てて 桜
 ナオ 遠出して島原巡り深呼吸 あ
 故郷の空しのぶカピタン 石
 スマホにはロマンズ詐欺のトラップが 桜
 日焼けの胸に顔を埋める 洋
 素裕の若衆漕ぐは月の舟 石
 蔵の奥ではジャズと珈琲 あ
 ナウ リノベーションアドリブ少しきかせつつ 洋
 うららの便り長き蘊蓄 あ
 花万葉十戸の村の花の宴 桜
 団扇作りは家族総出で 石
 連衆 鶴飼桜千子 岩崎あき子 林 転石
 (現代仮名)

常夏の座

二十韻「飛驒の里」

鈴木千恵子 捌

Zoom

秋涼し円空仏の飛驒の里

美智子

小さき祠は月影の中

徹心

朋友へ鮭の燻製手土産に

濤声

下駄を鳴らして上る坂道

言也

ウ ゆるゆると検査結果を聞きに行き

千恵子

データ重視の恋の作戦

声

色の道負けに不思議の負けはなく

也

五線譜に書く思ひ出の曲

智

乾杯は布哇の浜の地麦酒で

声

裏返りつつ水くらげ来る

智

ナオ 足早に小雨小路をだらり帯

心

暖簾わけたららのつべらぼうが

也

マスクつけGOTOEI賑はへり

声

逢へない人がさらにいとし

千

あなたへの艶文照らす夏の月

也

心もとなき蜘蛛の細糸

心

ナウ パソコンの誤操作画面真っ黒に

千

袖たくし上げ籠にクレソン

心

人の手の届かぬほどの花大樹

声

忘れられない野遊びの午後

也

連衆 聖成美智子 佐藤徹心 小原濤声

吉丸言也

篝火の座

二十韻「風切羽を」

本屋良子 捌

Zoom

二百十日風切羽を拾ひけり

良子

月上りくる古里の丘

敏枝

頂に金木犀の香りぬて

了斎

図書館へ本返し忘れる

敦子

ウ 趣味の絵が思ひもかけず入賞し

枝

友の乗りこむパリ行の便

良

明滅に戦乱兆す冬銀河

斎

盲導犬は身じろぎもせず

枝

官僚の妻の内助の勇ましく

敦

涙流した方が負けです

純子

ナオ またしても私の恋は汗まみれ

斎

いつまでも揺れ止まぬ吊り床

良

先づ酒と遠来の客大声で

枝

鎌倉殿に首を斬らるる

斎

虚無僧の尺八を聞く冬の月

純

泥鰌掘りにも慣れたこのごろ

枝

ナウ 思ひ立ち新規事業の主となり

純

鶯餅の凹み愛らし

枝

初花の苔めばすぐに緩む空

斎

くねくね歩く遠足の子等

敦

連衆 箭内敏枝 鈴木了斎 武井敦子

近藤純子

野分の座

二十韻「卑弥呼の空の」

由井健 捌

Zoom

稲雀卑弥呼の空の広かりし

健

ぼんやり浮かぶ八月の月

香織

翌日の運動会の準備して

をんみ

靴も洗へるクリーニング屋

鄭和

ウ 自転車で世界一周五年越

裕介

傘借りたのがそもそも縁

健

睦言を聞かぬふりするブルドッグ

織

金継ぎの皿からつぼのまま

み

光琳忌墨付きの紙見当たらず

和

ぐつと飲み干す本場泡盛

介

ナオ 輪になつてかごめかごめと地蔵尊

健

スマートレジを採用の店

織

アバターの面接官が美男子で

み

けとぼし食べる彼を食べたい

和

満月は冬の余情を留めをり

介

沁みる夜汽車で望む山稜

健

ナウ 榛名湖のシャッターチャンス待ち続け

織

若人の夢やがて芽吹くか

み

本舞台役者変化の花の笑

和

畳に映る蝶々の影

介

連衆 平林香織 福澤をんみ 高山鄭和

和田裕介

玉鬘の座

二十韻 「きりぎりす」 箭内敏枝 捌

きらきらと雨待つ麦の穂波かな 敏枝
 雲峰の間を抜ける飛行機 桃胡
 兄弟のピアノ連弾きりもなし 美代子
 追ひかけつこはいいつも引き分け 裕介
 泣顔の涙を隠す暗がりに 了斎
 並ぶ枕へほのと月代 胡
 もつと早く来てと抓られ秋の宿 斎
 この身の冷えてやや震へだし 介
 かき回す犬猫のゐて和みます 枝
 優勝カップ光るリビング 代
 ナオ 新大陸の航路描かれてゐる海図 介
 子等へ伝へん毛糸編む柄 胡
 月明の酒は熱燗屋台にて 代
 美空ひばりの恋歌が好き 斎
 ごめが飛ぶあなたも飛んでこないかな 全
 いやはや肥えたうちの母ちゃん 枝
 ナウ かるかんをお土産にする薩摩武士 胡
 温んだ水でいつも歯磨き 代
 雪隠の小窓の外を花ふぶく 胡
 なかば霞むか遠浅の海 介

連衆 裏谷桃胡 山田美代子 和田裕介
 鈴木了斎

初音の座

二十韻 「豌豆や」 鈴木千恵子 捌

豌豆や地球の自転まねる蔓 千恵子
 どこへ行くのと問ふは夏蝶 桜千子
 がま口の数ふる小銭きりもなし 健
 ジャスマンティーを揺り椅子に飲む 未悠
 探偵は隅の老人窓の月 荷夕
 浮気調査は夕霧の中 千
 禁断の実と知りながら林檎食べ 桜
 貨物列車に豚は満載 健
 目的を教へられずに兵士征く 悠
 うちの秀才ゲームチェンジャー 夕
 ナオ 芭蕉忌にゆるりゆるりと墨を磨る 千
 寒九の水に月の映りて 桜
 ゴンドラの唄を聴きつつ渡し舟 健
 ワクチン接種証明を持ち 悠
 免疫のない男書く初心な文 夕
 京の舞妓の里は茨城 千
 ナウ 乾杯は金の雫といふワイン 桜
 鈴を転がすやうな囀 健
 長調の歌曲独唱花ふぶく 悠
 春のスカーフふはり肩先 夕

連衆 鵜飼桜千子 由井健 棚町未悠
 西田荷夕

胡蝶の座

二十韻 「朝掘りの」 高山鄭和 捌

朝掘りの筍飯や湯気のぼる 鄭和
 厨に響く郭公の声 雅子
 全自動運転車など走るらん 敦子
 同級生に出した絵手紙 志保子
 月明しジャングルジムに残る子ら 美智子
 行くか行かぬか穴惑する性 敦
 秋の宿こんな私は他人の妻 雅
 ブエノスアイレス街角のカフェ 敦
 採譜する教師古楽器マニアらし 智
 泪拭はで語る越し方 和
 ナオ 夜咄の茶事に万端心して 志
 メガくつまめに碎け散る月 敦
 大漁旗立てて港へ帰る船 雅
 女たむろし猫もたむろす 全
 ブレーキの効かぬあいつに惚れたバカ 敦
 鎌倉殿は時に助平 鄭
 ナウ 高みより青きまほらを眺むれば 志
 霞立ちたる北の島々 智
 花衣祖母の手触り残りけり 雅
 シロツメクサで作る冠 敦

連衆 武井雅子 武井敦子 北龍志保子
 聖成美智子

南砺市いなみ全国連句大会 2022
受賞歌仙四巻

152

富山県知事賞

歌仙「冬夕焼」

衆議判

かつてこのやうな恋あり冬夕焼 了齋
 慕情凍てつく文箱の底 聰
 除雪車の角曲がりゆく音消えて 齋
 絡線時計喇叭吹き出す 聰
 月からの金糸銀糸に指からめ 齋
 和紙に切り抜く芙蓉一輪 聰
 良き友が花野の細き径を来る 齋
 大吟醸の瓶をぶら下げ 聰
 唐突に語る異国の飯のこと 齋
 タカジアスターゼ今に欠かせず 聰
 謎めいてゐる洋館の深き窓 齋
 水晶玉を撫でる細指 聰
 くながひは酒酔星を祀りつつ 齋
 羞ひの汗零す半月 聰
 猫の戸を潜り黒猫歩み去る 齋
 鼻毛抜いては眠る駐在 聰
 散る花になつて旅する夢の中 齋
 田螺さながら進むSL 聰
 ナオ 蜃気楼見ゆと報せる広報車 全
 ヨナ抜き音階鼻歌にあり 齋
 希臘語をすらすらと読む孫娘 聰
 狐と鶴のやうにやりあふ 齋
 嫌ひよが実は好きよと分かりかけ 聰
 点けた灯をまた消して褥へ 齋

駅前によきと立ちたる丸いビル 聰
 くねくねくねとスケボーの子等 齋
 円周率は三と答ふるおほらかさ 聰
 とにかく長く伸びる自然薯 齋
 月代を右往左往のはぐれ雁 聰
 秋の遍路が独り逆打ち 齋
 ナウ クラインの壺辿る如生きて来し 聰
 耳に当てたる巻貝の殻 齋
 豎琴の調べかそけく流れぬて 聰
 糸練車回るひねもす 齋
 産土の杜に集ひて花筵 聰
 聞いた聞かない亀の鳴く声 執筆
 連衆 鈴木了齋 杉本 聰
 令和四年一月二十九日起首 同二月十四日満尾
 文音

南砺市教育長賞
歌仙『悪の華』

杉本 聰 捌

『悪の華』 耽溺したり神は留守 聰
 放蕩の先冬の晴朗 一枝
 売薬さんお国訛りのやさしくて 聰
 インターネットでできぬ付き合い 枝
 日は西に月は東の夕間暮れ 聰
 車を降りて野菊咲く丘 枝
 ナウ 縦横にコスプレの行くハロウィーン 聰
 ケルト歌姫透き通る声 枝
 薄絹をとれば群れ寄る侏儒七人 聰
 人工知能に習ふあれこれ 枝

新型のウイルス退治は儘ならず 聰
 キーワーカーはまさに地の塩 枝
 夜勤終へ辿る家路に蓬長く 聰
 新酒火入れの屋根照らす月 枝
 法曹を目指す長男上京し 聰
 四角四面で演歌大好き 枝
 看板の金釘をかした花の宿 聰
 遍路仲間で足湯のんびり 枝
 ナオ 風光る大志抱きて青年は 全
 原爆禁止叫び辻立ち 聰
 玄関に置かれしままのベレー帽 枝
 背伸びながながまた眠る猫 聰
 寒暄の喉を潤す御御御付 枝
 けふは家族と励む煤掃き 聰
 先生の精進潔齋半ばにて 枝
 夢の枕に忘れぬ人 聰
 愛しくも捨つる他無しオフィーリア 枝
 いつそ狂ふて狂ひ死にたや 聰
 三日月はあの日と同じ空にあり 枝
 糞虫鳴いて揺れる軒先 聰
 ナウ 豊の秋家の手入れも始めぬば 枝
 ひたすらに待つ曾孫誕生 聰
 古布を継ぎお手玉縫へる媪ぬて 枝
 視界去りゆく引鶴の列 聰
 経巡りて帰るふるさと花盛り 枝
 春眠覚めて抹茶一服 執筆

連衆 西田 一枝
 令和三年十一月七日起首 同十一月二十一日満尾
 文音

南砺市議会議長賞

歌仙「ふと拾ふ」

佐藤徹心 捌

ふと拾ふ団栗ならばふと捨てる

徹心

垣根にもたれ黄菊白菊

千波

月射して録画ランブの点るらん

心

メガネルーペに慣れたこの頃

波

かな文字を彩煙墨でのびやかに

心

川向うから郭公の声

波

ウ
片陰に閑持て余す人力車

心

ガレージセルへ古着持ち込む

波

犬の名を呼んだら君が返事して

心

女神裸像がにやり目配せ

波

携帯が大きな地震警告す

心

いつしんに研ぐ刺身包丁

波

攻め時と楯投げ入れる登り窯

心

ゴッホ竹む月冴ゆる路地

波

大布で凱旋門をラッピング

心

いつものやうに空を雲行く

波

かざす手をすると逃げる花吹雪

心

ほら臆病な鱈五郎なの

波

ナオ麗らかに菓鴨地蔵の賑はへり

全

頑固一徹かへぬだし汁

心

腹立ちのだんだん晴れる山歩き

波

唸るシュートが挟る内角

心

若者ら温暖化阻止連呼して

波

屋の逢瀬は帯もはがゆく

心

恋朦朧底なし沼の奥の奥

波

曇り硝子を上るででむし

心

リハビリにギブスを砕く音鈍く

波

つくづく沁みる親の戒め

心

落人の糞寄り添ふ里の月

波

流鏑馬駆ける秋爽の杜

心

ナウ栄転を榊の新酒で乾杯し

波

包み開けばリーガルの靴

心

コンポート仕上がる香り部屋中に

波

遠い汽笛が眠気引きよす

心

花盛る図書館窓の真際まで

波

S字にくねる坂に蜃楼

執筆

連衆 藤千波

令和三年十月二十四日起首 同十一月十五日満

尾 文音

付句各一句互選・批評

佐藤徹心

「ふと拾ふの巻」に入賞の栄を賜り、選者の皆様・大会関係者の皆様にお礼を申し上げます。四年毎に開催される大会なので、今回が二回目

の応募でした。同座された藤千波さんは館林連句会のお仲間、初めての文音による両吟作品です。館林連句会は二〇〇一年にこの地で開催された国民文化祭を機に発足した会で、初期には田山花袋忌連句大会を毎年初夏に開催し、式田恭子さん、鈴木了齋さんなども度々捌手と

して参加されたと聞いています。毎月の例会で使用している同市芸術会館には、了齋さん等の二〇〇一年の作品が額装されて今もお守りのようにエントランスに展示されています。

嬉しい入賞の記念に、互いの句を一句選び、選評してみました。

藤千波 選

ふと拾ふ団栗ならばふと捨てる 徹心

日頃よくある動作が切り取られていて、思わず顔がほころぶ。気に入った木の実や落葉・小枝等を拾うのが好きで、特に秋はこれらを室内に飾って楽しむ。この句の拾う、捨てるの動作は、無意識のようである、意識下で何かが作動しているかに見えるのは、恋句の趣を醸し出しているからなのだろう。

佐藤徹心 選

ほら臆病な鱈五郎なの 千波

一巻中唯一の口語体の短句が、裏の折端に強いアクセントを付けていると思う。前句の「逃げる花吹雪」に付いているし、思わぬ展開に驚かされる。干潟の泥から大きな頭を出し、飛び出た両目で臆病そうにキョロキョロ、ヨシヨシと穴を出ると、長い竿がブーンと撓り、後から来た針にあえなく御用。捕まり方までなんとも愛嬌がある。

連句は一巻を通してみるのが本来でしょうが、思い出作りのお付合いと、ご了承下さい。

●既往の行事

- ・令和四年六月二十六日、アルカディア市ヶ谷にて第三十二回猫蓑同人会総会を開催。議事ののち六卓に分かれて源心を興行。当日作品は今号に掲載。
- ・令和四年七月二十一日(木)に、江東区芭蕉記念館にて第百六十回猫蓑会例会(猫蓑総会)を開催。議事に引き続き五卓に分かれ歌仙を興行。当日作品は今号に掲載。

●今後の行事予定

- ・十月二十七日(木)に、第百六十一回猫蓑会例会(芭蕉忌・明雅忌)を江東区芭蕉記念館にて開催予定。あわせて正式俳諧を興行予定。
- ・令和五年一月二十二日(日)に、第百六十二回猫蓑会例会(令和五年初懐紙)をアルカディア市ヶ谷にて開催予定。
- ・令和五年四月下旬に、亀戸天神社藤祭例会を開催。神楽殿にて正式俳諧興行の後、二十韻を興行予定。

●猫蓑会リモート (Zoom)

- ・六月四日(土)に開催された第九回の作品と、八月十一日(木)に開催された第十回の作品を今号に掲載。十月十日(月)に開催された第十一回の作品は次号に掲載予定。第十二回は十二月十日(土)に開催予定です。
- ・「猫蓑会リモート」は原則として偶数月第二土曜日の午後一時から開催しますが、第十一回は十月十日祝日「スポーツの日」に変更しました。今後とも臨時に日程を変更することがあります。猫蓑会公式サイトなどでご確認ください。

●リモート連句講習会を開催します

- ・ご希望があれば奇数月第二土曜日午後「猫蓑会リモート室」にてリモート連句講習会を開催します。筆記係やホストを務めるために必要な事柄も。
- ・ご希望の方は、平林香織《khir384@gmail.com》宛にメールでお申し込み下さい。その他の「猫蓑会リモート室」使用申し込みも平林まで。

●会員の受賞

- ・南砺市いなみ全国連句大会2022
富山県知事賞
歌仙「冬夕焼」 衆議判
 - ・南砺市教育長賞
歌仙「悪の華」 杉本 聰 捌
 - ・南砺市議会議長賞
歌仙「ふと拾ふ」 佐藤徹心 捌
 - ・浪化賞
歌仙「冬桜」 近藤純子 捌
- 以上四作品を今号に掲載しています。

●猫蓑基金にご協力ありがとうございました

- ・上野知子様 令和四年七月 五千円
- ・基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店
猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員

- ・鶴飼桜千子(東京都) 令和四年七月入会
- ・今井多紀子(埼玉県) 令和四年九月入会

●会員の訃報

- ・猫蓑同人の吉田酔山様が令和四年七月二十五日に永眠されました。謹んでご冥福を祈ります。

- ・猫蓑会会長、生々庵青木秀樹様が令和四年九月四日に永眠されました。謹んでご冥福を祈ります。

●大江戸吟行会について

- ・次回の大江戸吟行会は十一月三日(祝日)、芝増上寺です。詳細は宇田川肇までお問い合わせ下さい。

●和漢連句会について

- ・今号6ページで紹介された「和漢連句会」は、毎月第二火曜日午後一時から、京橋区民館で開催です。詳細は鶴飼桜千子までお問い合わせ下さい。

●猫蓑作品集第二十六号作品募集

- ・来年は、猫蓑作品集第二十六号を刊行します。会員は同封の資料に従い、ふるってご出稿下さい。

●「猫蓑通信」バックナンバー

- ・猫蓑会公式サイト《<http://www.neko-mino.org>》内「資料室」にてすべて閲覧できます。

季刊 『猫蓑通信』 第百十八号

- 発行人 猫蓑会
- 事務局 佐々木有子
- 〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

- 編集人 鈴木了齋
- 編集委員 奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・平林香織・御園魚彦

(五十音順)

印刷所 印刷クリエイト株式会社